

## フアスト

宮尾美明

朝起きてとても奇妙な気がした。何がどう奇妙なのかは表現しにくい。例えばくたくたに疲れきって眠っても泥沼から這い上がるような感じとか、びよいと布団から抜け出して飛び出していきたい気分とか、妙に気分がハイとか逆にダウンとか、まあいろいろあるんだけど、そのどれにも当てはまらない気分、朝起きたときの。そのどれにも当てはまらない不思議な気分。いやいや不思議なんて甘ちよろいものじゃなく、とてつもなく不安な気持ち。痛いとかだるいとか重いか辛いとかそんな具体的なものではなく。ただ訳の分からない不安だけが覆い被さってくる気分。でもまあたいしたことなどあるまい。そのうち治るさと思っただけ、ただか指が変。そう——変なのである。慌てて指を立ててみた、右の指はちゃんと私の意思通りに動いたが、左の指はだらんと下がっていき、思うようにならないのである。

でもよいしょと立ち上がって歩き出していつもの仕事に取りかかるに、違和感はあまりない。犬の散歩をしてくれば

しまった。あれ？ 足まで言うことを聞かないのか。焦ってしまっただが、

「さあ乗って」

言われるままに担架に乗った。

「誰が一緒に来られますか？」

当然聞かれたが、

「あいにく誰もいません。唯一いる夫は半身不随で障害二級で一緒に出かけられるどころではなく介護が必要なくらいです。私一人で大丈夫です」

それじゃあとということで、救急車が走り出した。

「誰かに連絡を取ってください」

というので片っ端から電話をしたが誰も捕まらない。やっと捕まった長女に病院に来よう頼んで、一息ついた。

コロナで救急車に乗っても病院が決まらないので走れないという話を聞いていたし、お産以外入院の経験もなく大きい病院にご縁がなかったので大丈夫かしらと思っていたがすんなりと病院が決まったらしく、ほっと胸をなで下ろした。

「左の指が言うことをきかないし、左の足は力が入らないので転んでけがをしたし、ああ、これは脳梗塞だ。左が効かないと言うことは右が切れたことで、まだましだったかもしれない」なんて考えてムクムクとわき上がる不安を何とか治めていた。

きつと治るだろう。そう思っただけで散歩に出た。でも、やはり奇妙だった。平らなはずの道が段差があるように傾いているのである。すぐに家に帰った。

「私、変だから救急車呼ぶね」

寝ていた夫に言う。なんとと言っても、四十代で脳出血で倒れた夫の介護を三十年も支えてきた強者である。何か変？——予感と不安は、夫が身近にいたから感じ取れたのかもしれない。夫には頼むことが出来ない。頼りの同居の次女は夜勤で家にいない。婿もまた朝早く仕事に出て行ったのもういない。

「もしもし、こんなことで救急車を呼んでいいのか迷っているのですが、一度見ていただいで判断していただけたらと思います。何だか変なんです、私」

救急車が来る前に必要な物を全部そろえて、

「行ってくるから。頼むね。今日は娘は夜勤明けの朝帰りだから」

段取りを整えて門までの階段を歩こうとしたら、転んで

もう三十年も昔、四十九歳で脳出血で仕事に倒れた夫に、その日に、

「今夜が山です」

と言った医者の言葉が頭の中を通り抜けていった。

「脳の大量の出血で命が助かって、植物状態か、重い障害が残ることになります」

その言葉通り集中治療室にいた夫は、自分がどこの誰か全く分からず知能は二歳まで落ち、野獣のごとくうなりながら体中のチューブにつながれていた。チューブを自分で抜き取ってしまうので、拘束されて集中治療室から出てきた。それから一年間病院に入院した。自分が誰か分かるようになるのに、一年では足りなかった。

「いつ思い出すのですか？」聞いた私に

「思い出すのではないのです。改めて学習するのです」

医者の言葉が私の絶望をさらに深いものにした。言葉も知能も運動能力もすべてが奪い去られていた。呆然と立ち尽くす家族の前でさらに呆然と、自分がどこの誰か分からず、歩くことも話すことも考えることも出来なくなった夫がいた。

入院一年の間に私が一番希望を持ったのは、仕事を終えて病院に行くと、ノートが置いてあった。開けると「あいうえお」が、歪んだつたない字でびっしりと書かれてあった。次のページもその次のページもついに最後のページま

で「あいうえお」に埋められていた。もう一冊には数字の羅列である。そしてミミズの這ったような字で自分の名前を書いたノートもあった。ああ、学習するってことはこういうことなんだ。偉そうに努力が足りないなどと子供に言うってきたが、自分だって本当に努力したことがあったんだろうかと思わせる血のにじむような努力だった。再度学ぶ証のノートだった。

夫は一年病院に入院し、そのあと三年リハビリセンターに入所して家に戻ってきた。障害二級だった。センターに仕事帰りに寄ると決まって夫のベッドは空だった。そして夜の暗い病院の長い廊下を、たった一人で黙々たよたよた歩いていった。

「ああ〜」  
二年経っても自分の妻だとは思わない。面倒を見ているおばさんだと思っていたらしい。

いつ行っても寝静まった病院の廊下を黙々と歩く練習をしている夫の姿があった。努力する姿はあのノートの字と同じだった。そして驚いたことに夫は職場復帰まで果たした。大勢の職場の人に支えられて夢が叶ったのだ。

そんな過去がなかったら、今回の自分の病気に際しても、「明日になったら治るわ」

などと放つておいたことだろう。脳梗塞は時間との勝負である。四時間以内に対処すれば後遺症がうんと少

普通のように見えても、実際は正直恐かった。大きく前とは異なっていた。どこがどうというのとは分からないが、病気になる前と後では全く違った。私はすたこらと歩いていると思っただけでも人から見たらすたこらどころかおぼつかない歩き方だった。実際走るのは恐かった。走ることもできなかったが、試しに走ってみたら全く走れなかった。恐ろしかった。

びっくりしたのは階段が全く降りられなかった。恐怖心がわいて奈落の底まで落ちていきそうだった。そして、床から立ち上がることが至難の業だった。何もかもあんなに簡単にできたことができなくなっていた。何よりびっくりするくらい疲れやすくなっていた。

「ここに入れてください」

瓶におはじきを入れる。そんな作業すら時間がかかった。シャワーに入った時は恐かった。あんなに容易に出来たことがこんなにも難しいなんて、果たして治るんだろうか、こんな状態で介護など出来るんだろうか、まだまだ沢山の仕事も残っている。そうだ、思い出した。絵が描けるだろうか？ 月刊誌の絵も、注文の絵も、美術館に出す大きな絵も、何もかもが病気をしている間に締め切りが迫っていた。退院したらまずアトリエに行こう、決心した。

「本当に一週間で退院ですね」

先生があきれるほど早く出してくれたのは、多分、「夫

なくて済む。その点では早く対処したと思うが、それでも甘く見ていたのだと思う。緊急病棟の一日目はまるでベッドから起き上がることが出来そうもなかった。検査と沢山の点滴につながれ、自分が自分だとは思えなかった。何かまるで分からなかった。おしっこすら自分で行くことが出来ず採ってもらっていた。後日、顔から火が出る思いがしたが、おしっこを取ってもらったのが、なんと教え子だった。

「どういう人かなあ、何気なく見ていたら先生の名前にびっくり」

お互いに真夜中のことではっきりと顔も見えず知らないままであったのが幸いだった。病気になるって何もかも人に助けていただかなきゃならないときには恥ずかしいなど思わなくてもいいんだ、とは思うものの、やっぱり恥ずかしかかった。偉そうに教壇から命令していた自分の昔を思い出して顔から火が出る思いだった。二日目になると、よろよろと何とか点滴の杖にしがみついて歩けるようになり、自分でトイレにも行けるようになった。三日目には一人で伝いながら歩くことが出来た。

四日目一般病棟に移った。

「夫の介護があるので、一週間で出してください」

そんな無茶な、とは言われなかった。本当に一般病棟に移ってからは、すたこら歩くようになっていった。一見全く

の介護の一言だったと思う、もちろん事実であるが、それ以上に追い立てられた絵を描くことも同じくらい必要だった。退院したその日にアトリエに入った。

「無茶苦茶や」

怒られても、私にはシンナーと絵具の匂いが必要だった。いつだって追い詰められたらこの匂いに救われていた。キャンバスに向かい描き始めるといつも通りにいかない。しかし、ブルブル震えながら始めた作業はいつの間にかいつものペースを取り戻し、絵具を出す時間はもたついたが画面を走るナイフと筆の勢いは何とか勢いをなくさずに走らせることが出来た。そして今回も同じだった。もうだめ、生きていけない、耐えられない——追い詰められるといつも絵の中に逃げ込んだ。今回も同じだった。そしてキャンバスの中で再び私が呼吸を始め、動き出す力が生まれてきた。

ファストフェイス(顔)アーム(腕)スピーチ(話した方)タイム(一刻も早く)

脳溢血察知のキーワードを口ずさみながら絵の中で私はいつも通り自由に遊び始める。

ファスト、この言葉を沢山の友人に紹介しました。若い頃は考えもしなかった病気が身近に迫ってきて、いつ何時自分もそうならないとも限らないと言うことで、誰も彼もが真剣に耳を傾けてくれます。感じたことを感じたままに書いたエッセイで賞をいただき本当に嬉しく思います。新たな勇気をいただきました。諦めていた色々なことにもう一度挑戦したいという意欲がわきました。ありがとうございました。



宮尾美明

みやお みあき

愛知県立大学で文学を学び、武蔵野美術短期  
大学で洋画を学び、現在絵描き、物書き  
文芸思潮 優秀賞、佳作、入選  
食の思い出コンテスト最優秀賞  
60歳からの主張 論文二席・川柳特別賞  
シャデイ八五周年贈り物語 準グランプリ  
島崎藤村文学賞 佳作  
北野財団論文二席 その他多数